

お人好し転生鍛治師は 異世界で幸せを掴みます！

2

ものづくりチートで
らくらく転生ライフ

著 かむら

Illustration: りーん

ノアル

猫獣人の少女。
持ち前の素早さを
活かして戦う。

Characters

ドreas

獣人村の頼れる村長。
妻であるアルジエには頭が上がらない。

アルジエ

ノアルの母。
包容力と愛情に溢れる良妻。

リム

ギルドの受付嬢。
親切でしつかり者。

ユレーナ

冒険者ギルドのマスター。
強者との戦闘が好き。

ショーマ

超不幸体質だった少年が鍛冶師に転生した姿。
女神に与えられた規格外な能力で
異世界を楽しみつくす！

ミラル

宿『みけねこ』の看板娘。
ショーマとノアルに懐いている。

はじまり

日本の田舎町で育った、ただの高校生だった僕、剣持匠真は今、異世界で猫耳美少女に抱擁されている。

なぜこんなことになつたのかといえば……発端は、不幸体質が高じて命を落としたことだつた。

前世での僕は、花瓶をはじめとした物が落ちてくるなんてことがしょっちゅうあつたり、学内でボールが顔面目掛けて飛んでくることが日常茶飯事だつたり。

とかく深刻な不幸体質だつた。

そんなある日、僕はバイト帰りにトラックに轢かれそうな少女を見かけてしまう。

彼女を助けるために僕は身を挺して……命を落とした。

でもそれは——不幸体質は神様の手違いだつたんだよね。

神達を統括する『最高神』フォルティは僕にその事実を教えてくれた上で、『異世界に転生させてあげる』つて言ってくれた。

とはいって、僕は規格外な能力を授けられてしまうと目立ちすぎてしまうし、自分で開拓していく面白みが減つてしまふかなって思つていた。

だから、僕は程々にしてほしいとフォルティに伝えていた。

でも、彼女は加減を知らなくて、物凄い職業を授けられてしまった。

まず一つ目は『鍛冶師』。

様々な素材を使って、武器や防具など、あらゆる物を作ることが出来る能力だ。

そして『魔導士』。

これは、どんな属性の魔法も高水準で使いこなせるというもの。

最後に『武神』。

これががあればどんな武器や防具もすぐ使いこなせるのだ。

こんな能力を授かってしまったから、なんだかことあることに目立つてしまつていてもするけど……それはもう仕方ないつて割り切つた。

そんな矢先、僕は一匹の猫と出会う。

その子は魔物に追われてズタボロで……

放つておけなかつた僕は、その子を助けてあげたんだ。

そしたらなんと、その子は猫じやなくて獣人が獣化のスキルを使って変身した姿だつた。

その獣人の少女こそが、今僕を抱きしめているノアル。
聞けば彼女は故郷である獣人村が襲われたところを、命からがら逃げ出してきたらしい。
早く獣人村に戻りたくとも、装備も足もない。
そのため依頼をこなしていたんだけど、そこで獣人村を襲つたのと似た魔族——ゴブリンジエネラルと遭遇。

なんとか倒したんだけど、その魔物がなんと魔道具『隸属の輪』によって人間に操られていたことを知る。

人が魔族を操つてゐるのだとしたら、再度獣人村が襲われる可能性がある。

『今すぐにでも村へ帰る』と言い出したノアルに、当然『僕もついていく』と伝えた後、こうして抱きしめられてしまつたというわけ。
相当嬉しかつたんだな。

「ノアル、もういいかな？」

「……ん、満足」

ノアルが抱擁を解くのを待つて、僕は言う。

「そうしたら、とりあえずゴブリンジエネラルの死骸を回収して、この隸属の輪についてもギルド

に報告しよう

「……ん」

「それが済んだら、今日のところは遠出するための食料とか必要なものを買いに行こう。それで、明日の早朝に出発するつて感じでどう？」

「……分かった」

恐らく、ノアルは今すぐにでも故郷の村へと戻りたいと思っているのだろう。
でも、流石^{さすが}になんの準備もなく向かうのが自殺行為だとは分かつているようで、僕の提案に素直^{すなお}に同意してくれた。

そうして今後の方針を決めた僕達は、とりあえず倒したゴブリンジエネラルの死骸を回収する。
そして一応周りに他の魔物がいないかを僕は探知魔法で、ノアルは匂いや音で確認。
結果、問題なさそうだったので、街へと戻った。

1 ユレーナさんとの戦い

街に戻ってきた僕達は、解体場にゴブリンの死骸を預け、ギルドへ。

「あつ、ショーマさんにノアルさん！」

依頼の達成報告専用のカウンターには、丁度ギルドの受付嬢^{うけいわじょう}のリムさんがいた。

「達成報告、してもいいですか？」

僕が聞くと、リムさんはにっこり笑つて頷く。

「はい、大丈夫ですよ！」

「この依頼を解決してきました」

僕が依頼の書かれた紙を渡すと、リムさんは言う。

「では、ギルドカードもお出しください」

そうか、ギルドカードを出す必要があつたんだった。

僕は慌てて懐からギルドカードを取り出して、リムさんに渡した。

ギルドカードには討伐^{とうばつ}した魔物の数や種類が自動的に記録される。

討伐依頼の時はそれを見せると達成報告が出来る、というシステムになつてゐるらしい。

この間、異世界で最初に出会つてから世話を焼いてくれているゲイルさんに、どういう仕組みなのか聞いてみた。

なんでも、倒した魔物からは経験値^{けいけんぢち}——魔力に近しいエネルギーのような物質が発せられるのだ
といふ。

そしてそれをギルドカードが感知して記録するという仕組みのようだ。

……正直ちゃんと理解出来ていてるかは怪しい。

ただ、ゲイルさんも『詳しくは知らん！ そういうものだと俺は割り切つてる！』と言つていたので、僕もそれ以上考えないことにした。

リムさんが手続きを進めてくれる。

「えーっと、ゴブリン五匹の討伐ですね……って、二人で十三匹も討伐してるじゃないですか！」

「えっ、しかも、ゴブリンジェネラルも討伐したんですか？」

「はい。ゴブリンを探す中で集落を見つけたので、そこにいたゴブリンを全部倒したんです」

「す、凄いですね……？ 青ランクと白ランクが出来ることじゃないですよ？」

冒険者の中にはランクというものがある。

ランクは達成した依頼や素行を総合的に評価された上で白、緑、青、黄、赤、紫、むらさき銅、どう銀、ぎん金、黒という順番で上がっていく。

僕は、ギルドマスターであるユレーナさんにブルーウルフという狼の魔物を四匹討伐した功績を認められ、白から一気に青に上げてもらつた。

でも、ノアルは強いものの、まだ登録したばかりだったから白なんだよね。

ちなみに、冒険者パーティにもパーティランクというものがある。

そちらはパーティ内のメンバー個人のランクを平均したものになる。

僕らのパーティランクは緑。

そして、受けられる依頼はパーティランクによつて決まるんだけど、自分のランクより一段上の依頼までしか受けられないんだよね。

今回受けた依頼は、青ランクの討伐依頼の中だと難易度なんいども報酬ほうしゅうも中くらいだった。

「ノアルにかなり助けられました。それと、戦つていて不審な点がいくつかあったので報告してもいいですか？」

「はい！ もちろんです！」

「実はですね……」

僕はリムさんに、倒したゴブリンジェネラルが魔法が付与された装備を着けていたことや、隸属の輪という魔道具を仕掛けられていたことを報告した。

あと、獣人村についてなど、ノアルの事情については、本人が拙い口振りではあつたが報告してくれた。

それを神妙な表情を浮かべながら聞いて、リムさんは口を開く。

「なるほど……ご報告ありがとうございます。実はここだけの話、同様の事例がここ数ヶ月の間にいくつか発生しているんです」

「そうなんですか？」

「はい。中には、魔物と会話をしているような素振りを見せる怪しい者達を見かけた、なんて報告もあって、ギルドでも秘密裏に調査をしています」

魔物と会話をする者達か……

もしかしたら、隸属の輪を使つて何か命令をしていたのだろうか。

「近いうちにギルドでも大規模な調査をする予定ですから、今回提供してもらった情報もギルド内で共有させていただきますね」

「役立ててもらえると、こちらとしても嬉しいです」

「何はともあれ、お疲れ様でした。報酬は上乗せさせてもらって金貨三枚となります。上位種を倒したので、ランクも上がると思いますよ！」

「え、そんなにすぐ上がるんですか？」

「実績は十分ですし、ショーマさんもノアルさんも素行がいいので上がると思いますよ？ 強い力を持つ人にはなるべく難しい依頼を解決していただきたいので、ある程度のランクまではすぐに上がるんじゃないですかね」

もうランクが上がるのか。

昨日青ランクになつたばかりなのに、こんなトントン拍子でいいのだろうか？

まあ、ゲイルさんの所属するパーティのリーダーであるクラウスさんとミリアンヌさんにもランクを早く上げた方がいいと言われたらし、ここは素直に喜ぶべきかな。

「あ、それと、僕達明日から獣人国のノアルの村へ向かおうかと」

「えっ、明日ですか？」

「……無茶なのは分かつてる。けど、村の皆が心配」

ノアルは思い詰めた様子でそう口にした。

「そうですか……うちのギルドでも何か出来ればいいんですが、すみません。国を跨いだ問題となると、ギルドは中々動けなくて……」

「……大丈夫。村から近い冒險者ギルドがある街に早馬^{はやま}を出してたから、そこからきっと助けが来てるはず」

「それならよかつたです。あ、でしたら、この街の北門から獣人国へ向かう馬車が出ていますから、途中までそれに乗つていくといいかもしれませんね」

「お、確かにそっちの方が良さそうですね」

「さすがに自分達の足だけで向かうのは体力的にもしんどそうなので、馬車で途中まで行つた方がいいだろう。

ちなみに、この世界では基本的に、国への出入りは大きな組織や貴族以外であれば自由で、面倒

な手続きなどを挟む必要はない。

セキュリティ的に大丈夫かと思うかもしれないが、その代わりに大きな街では必ず検問が行われている。

それ故に悪いことを考えていてもそう上手くはいかないそうだ。

「何はともあれ、どうかお気を付けて行つてくださいね……？」

「はい、もちろんです。何よりも命ある物種ですから、なるべく無理はしないようにします」

僕がそう言う横で、ノアルが拳を握る。

「……ショーマはノアルが守る」

「はは、ありがとうございます。僕もノアルを守るよ」

「……つ。こういう時、私は無力ですね……」

リムさんがぼそつと何か言つた気がしたんだけど……

首を傾げながら、僕は聞く。

「あれ、何か言いましたか、リムさん？」

「あつ、いえつ……！ 無事に帰つてくることを願つてますっ！」

「ありがとうございます」

それからリムさんに、今日の依頼の報酬である金貨三枚をもらい、ギルドを後にしようとしたの

だが――

「お、ショーマじゃないか。丁度いいところに！」

ギルドの一階からユレーナさんが下りてきて、僕に声をかけてきた。

「あ、ギルドマスター！ 仕事は終わつたんですか……？」

「ああ！ ちゃんと終わらせてるから安心しろ！」

ユレーナさんはリムさんの問い合わせに笑顔でそう答えると、僕達の方へと歩み寄つてくる。

「お疲れ様です、ユレーナさん」

「ああ、ようやく溜まつた仕事が片付いたよ」

「はは、それは何よりですね。あ、ノアル？ この人はユレーナさん。このギルドのギルドマスターだよ」

僕がギルドマスターと会つたのは、まだノアルとパーティを組む前だつたから、軽く紹介しておいた。

ノアルはそれを聞いて、軽く頭を下げる。

「……ギルドマスター。よろしく」

「おつ、よろしくね。ショーマがパーティを組んだつて話はさつき聞いたが、中々出来そうじゃないか」

強者は相手の力量を雰囲気とかから測れる……のかな？

いや、今はそんなことどうでもいいな。

それより、さつきユレーナさんが口にした『丁度いいところに！』という言葉の方が気になる。

「それで、何か僕に用事があるんでしたっけ……？」

「おお、そうだったそうだった。この前約束したこと、覚えてるか？」

「この前、というと模擬戦の話ですかね？」

「そうだ！ 今からやらないか？」

「んー、そうですね……僕は構いませんよ。ノアルはどうする？」

「……付いてく」

「よし、決まりだな！ それじゃあ訓練場くんれんじょうへ行こう！」

「分かりました。リムさん、ギルドカードは預かつてもらつていいですか？」

「はい、もちろんです！ ギルドマスター？ 程々ほほほにしておいてくださいよ？」

「分かつてる！」

そんなわけで僕達は、ギルドの地下へと向かうことに。

訓練場は、地下にあるそ�だ。

「いやー、仕事を早く終わらせた甲斐かいがあつたよ！ 誰か相手がいないかと思って下まで下りてき

たんだが、ショーマがいてくれてよかつた！」

「僕でよかつたんですか？ 他にも強い人はいるんじや？」

「いるにはいるが、折角なら戦つたことのない奴やつとやりたいだろ！」

「うーん、ちょっと僕には分からなほんわかいが……」

ユレーナさん、思ったよりも戦闘好きみたいだ。

そう思つていると、ユレーナさんはノアルに視線を向ける。

「あんたもやるかい？ こちらとしては大歓迎だいかんげいだが」

「……ん、やる」

お、意外とノアルもやる気だ。

「よし、着いたよ。ここが訓練場だ」

「広いですね」

「……おー」

訓練場は結構広い。

まさかギルドの地下にこんな広大なスペースがあつたとは。

そんなふうに感心していると、ユレーナさんが説明してくれる。

「この訓練場の壁は魔力を通さないから、魔法も撃てるぞ。物理攻撃でも簡単には壊れないから、ある程度全力で戦える」

「なるほど……凄いですね」

「よし、じゃあ高速やろうか？ 魔法もありでいいぞ？ アタシはほぼ使えないがな」

ユレーナさんが魔法を使えないとは初耳だ。

僕だけが魔法を使えるなんて、大分有利に思えてしまう。

「いいんですか？」

「ああ。全力でやらないと面白くないだろう？ 行動不能になるか、降参したら負けっていうルールでいいか？」

「分かりました」

何気にこの世界に来てから初めての対人戦だな。

僕は息を吐いて集中力を高めながら、訓練場の端に移動し、対面の端にいるユレーナさんと向かい合う。

正面に立つユレーナさんは、いわゆるシャムシールと呼ばれるような曲刀を無造作に構えている。僕もロングソードを構え、魔法をいつでも放てるよう、準備しておく。

今回は、ノアルが審判を務めてくれることになった。

僕とユレーナさんがノアルに向かつて頷くと――
「……始め」

ノアルの開始の合図と共に、ユレーナさんが突っ込んでくる……って、速っ！？

三十メートルくらいは離れていたのに、もうユレーナさんは十五メートルくらいの距離にいる。

『ロックバレット』！

慌てて僕は魔法を唱え、小さな土の弾丸をいくつも発射した。

これでうかつには近づけないはず……

そう思っていたのに、ユレーナさんは目にも留まらぬスピードで曲刀を振るい、自分に当たりそうな土弾だけを叩き落とす。

「ふつ！」

そして、そのままスピードを落とさず突っ込んで、僕目掛けて剣を振ってきた。

僕はそれをロングソードでいなそとしたんだけど……重い！

バランスを崩しかけてしまう。

「くつ！」

「ほらほら！ 攻めないと勝てないよ！」

その後も凄まじいスピードで剣を振つてくるユレーナさん。

このままだと、受け切れない……！
そう思つた僕は、バックステップでユレーナさんの剣を紙一重かみひとえで避けると同時に、その方向に魔法で風を起こす。

『ウインド』！

その処理にかかずらつている隙すきに距離を取ろうと考えてのことだつた。

なのに、それすら曲刀を一振りするだけで消え失せた。
「ほー、面白い魔法の使い方だね。いいじゃないか！」

いや、この人強すぎる！

どうする？！

このままだと、何も出来ずに終わる！

「遠慮えんりょしてるね？ そんなんじゃアタシを止められないよ！」

遠慮だなんてどんでもない！

魔法は効かない、剣でも勝てない。

ならどうする？

本当に手詰まりか？

他に何か手はないか？

……ダメだ、何も思いつかない。

とりあえずは時間を稼がなくては……！

『ファイアウォール』！

炎の壁を作り出した。

火魔法は使わないつもりだつた。

土魔法と比べて相手を怪我けがさせる可能性が高いからだ。

でも、ここまで戦つて分かつた。

恐らくこの人なら歯牙しがにもかけないだろう、と。

『ロックウォール』！

火の壁の後ろに土の壁を作り出した。

流石のユレーナさんも足を止めた。

でもそれだつて数秒で打開されてしまふに違いない。

その数秒の時間の中で、どうにかして一矢報いっしやくいわる方法を考えなくては。

魔法も剣も効かないユレーナさんに一撃を入れるために、どうにかして意表いひょうを突かないと……

何か手はないか……？

「ハアアツ!!」

ユレーナさんの裂帛が聞こえた。

ほぼ同じタイミングで、壁に何かがぶつかる音がする。
なんだなんだ!?

僕が壁の横から少しだけ顔を出し、ユレーナさんの方を見てみると、ファイアウォールが跡形もなく消え去り、ロックウォールにも大きな亀裂が刻まれていた。

ユレーナさんは、さっきの位置から動いていなかつた。ただ、剣を振り抜いた体勢でこちらを見ていた。

もしかして、斬撃を飛ばしたの!?

飛ばした斬撃でファイアウォールを消し去つて、ロックウォールにもダメージを与えたのかこの

人!?

「降参かい?」

驚いてる僕を見て、ユレーナさんが曲刀で肩をトントンしながらそう聞いてくる。

……確かに、悔しいがこの人には今の僕じやあ勝てないだろう。
けど、最後までやれることはやるべきだ。

「いえ、まだです!」

「お!　いいねえ、最後まで楽しませておくれよ!」



なんとかして一矢報いてやる！

*

「参りました……」

ユレーナさんは、大した反撃も出来ずに負けてしまった。

途中、風魔法で強化したロックバレットが数発ユレーナさんの服を掠めたくらいで、ユレーナさんはほとんど無傷だ。

「いやあ、中々楽しかったぞ！ 普通に強いじゃないか、ショーマ！」

「いや、ほとんど何も出来なかつたんですけど……」

「そんなことないぞ？ 大半の奴は最初の立ち合いで降参しちまうから、ここまで長く戦えたってだけでも十分だ！ 何発か危ないのもあつたしな！」

「僕としては、ユレーナさんが予想を遥かに上回る程に強かつたので驚きました。金ランクの冒險者つて、皆さん、ユレーナさんくらい強いんですか？」

「んー、人によるんじやないか？ 近距離の攻撃手段しか持たない相手だつたらアタシは負けなし

だが、たとえばミリード広い場所でなんでもありの勝負になつたら、大規模魔法で吹つ飛ばされるかもな。まあ、簡単に負ける気はしないがね！」

大規模魔法に対しても、対抗手段があるのか……

とんでもないな。

「それで、ノアル？ アンタもやるかい？」

「……ん！ お願いする。ショーマ、剣出して」

「分かつた。一応怪我には気を付けてね」

「……ん、了解」

僕はアイテムボックスからノアルの双剣(そうけん)を出して手渡した。

抜き身の剣を持つたまま移動するわけにはいかないので、基本的にノアルの双剣は僕のアイテムボックスにしまつてある。

ノアルはそれでもいいのかもしれないけど、依頼の時とかはいつ戦闘になるか分からない。装備出来るように、今度鞘(さや)とか作ろうかな？

そんなことを考えつつ、審判を務めるべく、僕は先程ノアルがいた位置に移動する。

全員が所定の位置についたタイミングで、ユレーナさんが言う。「よし、じゃあやろうか！ 遠慮なくかかつておいで！」

「……ん！」

「それじゃあ、いきますよ……始め！」

僕の合図で二人の試合が始まった。

*

「あ、ショーマさん！ 大丈夫でしたか？」

模擬戦を終え、僕達は受付にいるリムさんのところへ戻ってきた。

「大丈夫ですよ、リムさん。とてもいい経験が出来ました」

「……負けた」

耳と尻尾^{しりぽ}をへにやつとさせながらそう口にしたノアルに、ユレーナさんは笑いながら言う。

「はは、ノアルも強かつたぞ！ 近接戦闘だけならショーマよりも強いな！」

そう、ノアルもユレーナさんには勝てなかつた。

試合時間は僕よりも短かつたが、剣戟^{けんげき}の回数自体は僕よりもかなり多かつた。

とにかく一人共動きが速くて、ちょこちよこ何をしているのか視認出来ない瞬間もあつたくらいだ。

それにしても、やはりユレーナさんは凄い。

試合を終えて、『八割くらいは全力を出した』と言つていた。

それだつて本当かどうかつてところだから、底が見えない。

でも、そんなユレーナさんのお墨付き^{すみつき}をもらえたつてことは、ノアルの近接戦の戦闘力は相当なものと見ていいだらう。

「じゃあ、僕達はこのあと色々と準備があるので、行きますね」

「準備？ どつか行くのかい？」

そう聞いてきたユレーナさんに、ノアルのために獣人国へ行くことをざつくりと説明した。

「ふむ……そうか。とりあえず、気を付けて行くんだよ。最近、森の様子がおかしいからね」「はい、しつかり準備して行こうと思つてます」

「まあ、お前さん達ならそういう負けないとは思うがね。実力はアタシが保証してあげよう」「はは、ありがとうございます」

2 準備

それからユレーナさんは、また今度模擬戦をするという約束を交わして解散。

続いて、ギルドの近くにある解体場にゴブリンの素材代をもらいにいくことにした。

そこでは持つていった魔物を解体した上で買い取ってくれるのだ。解体場の責任者——グラッドさん曰く、普通のゴブリンの素材はそこまでの値段にならず、体内にある魔石が売れるくらいらしい。

魔石とは、魔物の心臓に当たる部位で、魔力を蓄えたり放出したりする性質がある。

魔道具の核に使われることが多いそうだ。

魔石を売るかもうか……迷つたけど、価値が高いゴブリンジエネラルの魔石はもらつておくことにした。

武器作りに使えるかもしれないしね。

自分で試してみて、ダメだつたらまた売りに来ればいいだろう。

その他の素材代は全部で金貨一枚になり、依頼の報酬金と合わせて計金貨四枚を手に入れることにした。

が出来た。

冒險者デビューしたてにしては稼げた方なんじやないだろうか？
「よし、報告も済んだし、色々必要なものを買いに行こうか」

「……んつ」

「お、ショーマ達じやねえか」

僕達が解体場を出ようとしたタイミングで、同じように解体を頼みに来たのか、ゲイルさんとバッタリ鉢合わせした。

「ゲイルさん、お疲れ様です」

「おう、ショーマ達もな。依頼はどうだつた？」
「依頼自体はつつがなく終わりましたよ。ただ、少しイレギュラーなことがありましたね」

「イレギュラー？」

ゲイルさんも近頃の異常について何か知っているかもしないので、僕は今回の依頼の中で起きたことをゲイルさんにもざっくりと話してみた。

「ゴブリンの集落か。普通は森の入口近くには作らないはずなんだが、最近多いな」

「そういう異常を最近ちょこちょこ耳にするつてリムさんからも聞きました」
それから僕は、獣人村へ行く予定であることも話す。

すると、ゲイルさんは神妙な顔つきで口を開く。

「お前達、獣人国に行くのか」

「そうですね。明日の朝一で馬車に乗つていくつもりです」

「気を付けろよ？ 遠出では何が起ころか分からぬからな。まあ、お前は元々旅人だったから、慣れっこかもしれない」

「え？ あ、ああ、そうですね」

「そういえば僕、そんな設定だつたな……」

『別の世界から転生してきました！』なんて言つたら目立ちすぎること請け合いでと思って、そういう訳をしたんだよね。

「特に森には用心しろよ。……これはなるべく秘密にしどけつて言われたんだが、お前らには言つておいた方がいいな」

「……なんでしょうか？」

ゲイルさんは、周りに聞いている人がいないか確認をしてから話し始めた。

「……森の異変なんだが、どうにも人為的に起こされているみたいだ」

「それは……どういうことですか？」

「一週間前くらいに、近くのダンジョンにこの街を拠点にしてる獣人のパーティーが行つたらし

い。その時、森の中で怪しい人間が複数人まとまって、何やら魔物に指示を出してゐたのを見たそ
うだ」

「あー、隸属の輪を使って、ですかね？」

「お、知つてるんだな？」

「実は、今日倒したゴブリンジエネラルにも着いてました」

「マジか。……で、そんな怪しい連中を見過ごすわけにもいかんから、獣人のパーティーが接触を試みたら、連中はそれはもう全力で逃げたらしく、捕まることは出来なかつたそうだ。けど、魔物の方はちゃんと倒して、持ち帰つてみたら、その魔物に隸属の輪が着いてて、存在が露見したつて話だ」

「なるほど……」

「ギルドも今、色々な手段で出所を探つてゐるらしい。だから、森を抜けるとなるともしかしたらそういうのに遭遇するかもしれないから、気は抜かない方がいいぞ」

「分かりました。ご忠告ありがとうございます」

確かに、獣人村に辿り着くまでにもまた今回のゴブリンジエネラルのような魔物に遭遇する可能性は十分にある。

性を引き締めていかないとな。

「あ、そうだ。ゲイルさん。遠出するためには必要なものを売っている店ってありますか?」「ん? ああ、それなら道具屋に行けば色々と便利なものを売っていると思うぜ?」

「道具屋ですか?」

「ああ。向こうの通りにあつて、冒険に役立つものとか、割どなんでも置いてあるぜ。……ただ、お前なら自分で作れるんじやないか?」

「ゲイルさんは周りに聞こえないよう、小声で僕にそう言ってきた。

「自分で、ですか?」

「ああ。道具屋には魔道具も置いてある。たとえば、魔物に見つからないための結界を張る石とか、寝るだけで体力が回復する寝袋とかがある。寝袋はともかく、結界を張る石くらいならお前でも作れるんじやないか? 確かあれも効果付与されたもんだったと思うぜ」

「なるほど……もしかしたら作れるかもしませんね。とりあえず、道具屋に行つて色々と見てみようと思います」

「それがいいな。あとは食料もしつかり準備していった方がいいぞ。うちのパーティーで遠出する時はミリーが収納魔法を使えるから、あらかじめ作つておいた食べ物を保管しておいてもらつて、必要になつたらその都度出してもらつていい。ショーマも収納魔法、使えるだろ?」

「それはいいですね。教えてくださいありがとうございます!」

「相変わらず硬^かえなあー。気にすんなつて! とにかく気を付けて行けよ? 帰つてきたら向こうの様子とか教えてくれや!」

「もちろんです」

快^{こころよく}く色々と教えてくれたゲイルさんは一旦そこで別れ、僕達は教えてもらった道具屋へと向かう。

その道中に、獣人村へ行くに当たつての打ち合わせをする。

「馬車を使つたら、どれくらいで着くだろう?」

「……何事もなく行けば、二日もかかるないと思う。私があつちこつち行きながらここまで来るのに、三日くらいかかるから」

ということは、少なくとも確実に一日は野宿^{のじゆ}することになるのか。

一応、手持ちはそれなりにあるから、十分必要なものは買い揃えられるとは思う。

何があるか分からぬし、食材をはじめとした日用品は少し多めに買っておくべきだろ。

「道具屋はあつちか。途中に市場もあるから……先にそつちに行つてもいい?」

「……もちろん」

「ありがとう」

ということで、この前立ち寄った市場に足を向ける。

まず食料を買いたいし、もしこの間行つた鉱石屋に酸化鉄があつたらもらいたい。

前回は処分費用が浮くからってタダでもらえたんだよね。

普通の人だつたら使い道がないような酸化鉄でも、合成・分離スキルを使えば武器作りに使う部分とそれ以外を仕分けられるのだ。

「よし、着いた。とりあえず食材から買おうかな。すぐに食べられるものを作りたいから、それ用の食材を……」

「……ショーマ、料理出来るの?」

「ああ、うん。ララさん程ではないけどね。家庭料理くらいは作れるよ」

「……そななんだ。ショーマの料理、楽しみ」

そう言うノアルは、耳をピコピコ、尻尾をゆらゆらと揺らして、期待のこもつた表情を向けてくる。

あんまり期待されると、好みに合わなかつた時に困るんだけど……

まあ、美味しいって言つてもらえるよう、頑張らなきやな。

そう密かに決心した僕は店に行き、色々な食材を手に入れた。

改めて見てみると、この市場で売っている食材はどれもかなり安い。

予算いっぱい買ってみたところ……余裕で一週間くらいは持ちそうな量の食材を買うことが出来た。

ちなみに、野菜や果物は見たことのあるものを中心に、少しだけ見たことのないものも買ってみた。

白色のピーマンっぽい奴とか、トゲトゲしたにんじんっぽい奴とか。

それと、肉類は主にお店の人に勧められた、魔物の肉を色々と買ってみた。

なんでも、僕が見たことのあるような家畜の肉よりも、断然魔物の肉の方が美味しいんだそう。

あとは、主食としてパンと乾燥パスタ、他にも牛乳やチーズなどの乳製品や小麦粉と片栗粉も手に入れた。

そして最後に、砂糖、塩、酢、醤油、味噌といった、いわゆる『料理のさしすせそ』と呼ばれる調味料に加えて、油や料理酒、胡椒にハーブなんかも少しずつ買っておいた。

うん、これだけあればなんだつて作れそうだな。

久しぶりにこういう買い物をしたから、つい夢中になつてしまつた。

珍しい食材も沢山あつたし、安かつたし。

「ごめんね、ノアル。時間かかつちやつて」

「……大丈夫、ノアルも楽しかつた」

よかつた、退屈^{たいくつ}はしてなかつたみたいだ。

そうして食材を買い終えた僕達は、今度は同じ市場にある、以前鉱石屋があつた場所に向かつた。市場の店は入れ替わりが激しいイメージがある。

また店を出していたらしいなど期待しながら足を運んでみたんだけど……そこには以前と全く同じ鉱石屋が店を構えていた。

ノアルは鉱石を見てもよく分からないので、近くの他の店を見て回つてること。

一旦別行動である。

「おはようございます」

「おう、いらっしゃい……って、この前の兄ちやんじやねえか！」

「ご無沙汰^{ぶさた}します。今は営業中ですか？」

「ああ、もちろんだ。なんか買つていくかい？ うちの商品は量も質もしつかりしてるぜ！」

そんなふうに言ってくれた店主に感謝をしつつ、僕は店内を見て回る。

ちなみに、この人はジストンさんというそうだ。

今後もお世話になるかもしれないでの、名前を聞いてみたのだが、快く教えてくれた。店主——もといジストンさんに頼んで、まずは鉱石を金貨二枚分用意してもらつた。量で言うと、合成・分離のスキルを使ってよりよい部分だけを抽出したら、僕が使つているロン

グソードを五本作れるくらいだ。

そういうえば、地球では鉄鉱石つてどのくらいの値段なんだろうか？

金貨一枚＝二万円と考えると、結構お得な気がするのだが、聞いてみるか。

「僕の感覚だと、このお店の商品はかなり安く感じるんですけど、鉱石つてどこから仕入れてるんですか？ ……あ、もちろん言いたくなかったら結構ですよ」

「いや、別に言つても問題はないぞ。鉄鉱石とか銀とか金、あとよく仕入れるもので言うと、ミスリルとかか。そいつらは色んな国の鉱山から採掘されるんだ。それぞれ色んな所から仕入れてるぞ」

「そうなんですね」

「ただ、鉱山だけじゃなくてダンジョンからも鉱石は入手出来るからな。そこでも鉄鉱石とかは取れるし、なんなら面白い効力がある鉱石も手に入る。そういうのが取れるダンジョンは重宝^{じゆほう}されてるぜ」

「なるほど。このお店だけでもかなりの量と種類がありますけど、枯渇^{こかつ}しないんですか？」

「鉱山の鉱物は枯渇することはないでもないが、ダンジョンの鉱石が枯渇したって話は聞いたことがないな。それに、そういうダンジョンには、鉄やらミスリルとかで出来たゴーレムつて魔物もいるらしいから、この世界から鉱石がなくなるなんてことはないんじゃないかな？」

ミスリルで出来たゴーレムなんているのか。

ひょつとしたら、ダイヤモンドで出来たゴーレムどかもいるのだろうか？

地球上にいたら争いが起きそそうだな。

「色々聞かせてください、ありがとうございました。ところで、この鉱石はなんですか？」

「それは浮空石だな。魔力を込めるど宙に浮くんだよ」

ジストンさんはそう言うと、浮空石を手に取つて、魔力を流して宙に浮かせてみせた。

おおー、本当に浮いてる。

「こんな感じで魔力を操作すれば上下左右、自在に動かせるぞ。魔力の量次第で飛ばせる時間が増えるが、俺みたいな一般人の魔力量だと、全力で魔力を込めても十分くらいが限界だな」

僕は身を乗り出して、聞く。

「面白いですね。用途としてはどんなものがあるんですか？」

「それがなー、この鉱石が発見されたのはつい最近で、まだこれといった使い道は分かつてないんだよ。武器にするにしても鉄より脆いし、仮に武器にしたとしても、動かすにはそれなりの魔力がいるから、魔法使いじゃないどとてもじゃないが使えない。かといって、魔法使いでさえ、『それを使うくらいなら杖を使う』って感じでなあ」

「なるほど……」

「魔道国家の研究者や鉱山国家のドwarfが試行錯誤するため大量に買つていたこともあつたが、最近見つけられたダンジョンでかなりの量が取れるもんで、需要が減つて売れ残っているのが現状だな」

武器として使えない、か……

本当にそうなんだろうか？

この鉱石を見て、色々とアイデアが浮かんできたんだけどな。

浮空石だけにてね。

「ジストンさん、その浮空石を買いたいんですけど、おいくらですか？」

「お、なんだ興味が湧いたのか？ 兄ちゃんは相変わらず用途がよく分からんものばかり欲しがるなあ」

「はは、そうかもしれないですね」

「値段は鉱鉱石の半分でいいぜ。ここにあるの全部買うのか？」

「はい、買わせてもらいます。あ、こっちの鉱石はなんですか？」

「それは色石つづて、主にアクセサリーとかに使われるもんだな。これも買うかい？」

「んー、それでは、一つずつください」

「それなら、浮空石と合わせて金貨一枚でいいぞ！」

取引を成立させた僕は、言われた通り金貨一枚を払い、かなりの量の浮空石と色石を手に入れた。ちなみに色石は、赤、橙、黄、緑、青、藍、紫の七色がある。

これを買ったのは、武器に色を付けられないかなーと思つたからだ。

分離スキルで色素が強い部分だけ分離させて、武器に合成すればいい感じになりそうな気がする。

今使つているロングソードは綺麗な銀色で悪くはないが、サブカル大好き人間の僕としては、ゲームや漫画^{まんが}に出てくるようなカラフルな武器にちょっと憧^{あこが}れがあるのだ。

「何に使うかは知らないが、なんか面白そうなもんが出来たら見せてくれよ！ そんでもって、またうちの店で色々と買ってくれ！」

「分かりました。また来ますね」

そう最後に言つて、僕はジストンさんの店を後にした。

ノアルは僕が鉱石屋を見ている間、近くの店にいると言つていたけど……

お、いたいた。

丁度道の反対側の出店にいたノアルに近づくと、何やら熱心に商品を見ていた。

僕の接近に気付かないくらいに。

「何か、気に入ったものあつた？」

「!? ……びっくりした」

「あはは、ごめんごめん。何か凄く熱心に見てたね？ 気に入つたの？」

「……綺麗^{きれい}だから見てた。けど、ちょっと高い」

ノアルが見ていた商品は、綺麗な色や形状をした、指輪^{ゆびわ}やネックレス、ブローチなどの装飾品

だつた。

その中でも、ノアルが一番興味を惹^ひかれているのは、指輪のようだ。

やつぱり女の子だから、こういう綺麗なものに惹かれるんだなあ。

でも、確かに少し値が張るものばかりだ。

とても質が良さそうではあるから、妥当^{たとう}な値段だとは思うが。

「……ショーマは終わつた？」

「うん、待たせてごめんね？」ノアルは何か買う？

「……大丈夫。次は道具屋？」

「そうだね。それじゃあ、行こうか」

「……ん」

そうして市場での買い物を済ませた僕達は、次の目的地である道具屋へと向かう。
少し歩いたところに、その道具屋はあつた。

かなり大きい二階建ての店舗で、一階と二階でそれぞれ用途の違う商品が売られているみたいだ。

「いらっしゃいませ。冒険者の方ですか？」

早速お店の中に入ると、すぐに若い女性の店員さんが声をかけてきた。

「はい、そうです。明日から少し遠出しようと思っているので、色々と揃えたいと思って」

「そうですか。こちらに店内の見取り図があるので、お目当ての品を探す参考になさってください。

何かご不明な点がございましたら、私共に声をかけてください。いつでも対応いたします」

「ご丁寧にありがとうございます。色々と見させてもらいますね」

「はい。どうぞ、ごゆっくり」

うん、いい店だな。

店員さんの対応然り、店内の雰囲気もいい感じだ。

「それじゃあ、色々と見て回ろうか。ノアルも何か欲しいものがあつたら教えてね？」

「……ん、了解」

それから僕達は店内を歩き回り、必要そうなものを手に取つていった。

毛布やタオル、鍋やフライパンにスプーンやフォーク、大小様々なお皿。それに、寝袋や雨を凌ぐための組み立て式の屋根まで売っていたので、それらをまとめて購入することにした。

屋根に関しては僕も作れるかもしれないが、作るのに沢山の材料がいるだろうし、大きいものを

作るとなると、それなりに魔力が必要だ。

値段もお手頃だつたし。

あとは、何かと使えそうな無地の布を何枚かと、裁縫道具さいほうどうぐを一式買っておいた。

これがあれば、服が戦闘とかで破れても直せる。

そういえば、裁縫も家事スキルの補正が入るみたいだけど、どうなるんだろう？

僕は、家事スキルのレベルも高いんだよね。

手際がめちゃくちゃ良くなるのかな？

そんなことを思いつつ、一階で手に取つたものを一旦お会計してもらつた。

値段は締めて、金貨四枚程だつた。

大分お買い得なんじやないかな？

地球とはやつぱり相場が変わつてくるんだろうか。

寝袋とか屋根とか、地球で買つたらそれなりの値段がしそうなものばかりだけど。

「二階は……魔道具を売つてるのか。行つてみる？」

「……んっ」

二階は、一階より少し狭い。

そこに、魔道具がぎゅうぎゅうに並べられていた。

それらの魔道具の前には値札と、どんな効力があるのかだつたり、使う際の注意点などがざく
りと書いてある。

そんな魔道具達を色々と見て回つていると、先程デイルさんが言つていた結界石を見つけた。
使い方は……セットで売つてる台座に球体の結界石を置いて、それを結界を張りたい範囲の四隅
に置き、魔力を流すことで起動するらしい。

結界の広さによつて消費魔力が変わつてくるみたいだ。

こつそり鑑定してみると、認識妨害^{にんしきぼうがい}という効果が付与されていて、結界の範囲内の人間は外から
は認識されず、何もない普通の風景に見えるそうだ。

確かに夜寝る時とかは便利だけど、値段は金貨五枚とかなり高めだ。

なので、僕はステータス欄^{わん}を開いて、認識妨害の付与が出来るか確認してみる。

どうやら、僕でも付与出来るみたいだ。

なら、これは買わずに自分で作ろう。

「……ショーマ、これどう？」

「ん？ 何それ？」

手に取つていた結界石を棚に戻していると、ノアルが何かを見つけたようで声をかけてきた。
その視線の先には、そこそこ大きめの、三人くらいは余裕をもつて寝転べそうな絨毯^{じゆうたん}があつた。

「……ん！」

こちらの値段は金貨三枚だつた。

この大きさで、付与もあるなら妥当なところだと思う。

確かめていないが、多分防汚の付与も僕は出来るので、適当な絨毯を買って同じようなものを作
れるとは思う。

でも、ノアルはこの絨毯の模様や色が気に入つたみたいなので、これを買うことにした。

今から絨毯が売つている店に行くのも面倒だしね。

そんなこんなで、この絨毯も店員さんに会計してもらつて、アイテムボックスにしまつておく。

そういうえば、アイテムボックスにホイホイんな物入れてるけど、容量とかは大丈夫だろうか？

いっぱいになつた気配は今のところないのだけれど……

まあ、いっぱいになつた時に考えればいいかな。

道具屋から出たところで、既に夕方の一歩手前くらいの時間になつていた。

「それじゃあ、宿に戻ろうか。他に買っておきたいものとかあるかな？」

「……十分だと思います」

「そつか。それじやあ戻つて、明日からのご飯を作つておこう」

「……ん、楽しみ」

*

現在、買い物を終えて泊まつてある宿『みけねこ』に戻つてきたわけだが、宿の前で僕はとあることを思い出した。

「ミルドさん達にどう説明しよう……」

そう、今朝のノアルは黒猫だったが、今は獣人の姿なのだ。

というか、そもそもこの宿に獣人は泊まつていいのだろうか？

ノアルの話では、ダメな宿もあるらしい。

悲しいことにこの世界では、獣人に対する差別感情を持つ人もいるのだ。

「……獣化する？」

「いや、獣化は魔力を使うんでしょ？　早いとこ魔力を回復させたいだろうし、その姿でもし泊まつちやダメって言われたら別の宿を探そう」

「……ごめんなさい」

「謝らないで。ノアルは悪くないんだから」

「……ん」

「それじゃ、行こうか」

不安からか、ノアルは僕の服の裾^{すそ}を掴んで、僕のすぐ後ろを付いてくる。

「あ、ショーマさん、お帰りなさい」

「ただいま戻りました」

そのまま宿に入ると、迎えてくれたのは、この宿の従業員のソーラーさん。

もう一人の従業員のトーラーさんは、双子の姉妹^{ふたごのしまい}らしい。

ちなみに、髪型がロングとショートで大きく異なるために見分けがつくが、それ以外はそつくりである。

「あれ、その子は？」

「あー……この子は見た通り獣人なんですけど、この宿つて獣人は泊まっちゃダメとかありますかね？」

「大丈夫だと思いますよ？　あまりないんですけど、獣人の方や魔族の方なんかもこの宿には泊まつたことがありますし、他の従業員の皆さんも、獣人がダメとかはないです。他のお客様が嫌だと

「言つても追い出すなんてことは絶対にしません！」

「そうですか、それを聞いて安心しました」

よかつた、宿を変える必要はないみたいだ。

最悪、森の方で野宿かなーとも思っていたので一安心。

「お、ショーマじやないか。どうした？」

そんな僕達の話し声を聞きつけたのか、宿の主であるミルドさんが受付の奥のスペースから顔を出してきた。

「あ、ミルドさん、えっとですね……」

僕はソーアさんに聞いたことを、念のためもう一度ミルドさんに尋ねてみた。

すると、ソーアさんの言つた通り、全く問題はないとのこと。

加えて、昨日助けた黒猫がノアルだったことや、今朝はこの宿がもし獣人NGだった時のために獣化していたことも告げた。

「なるほどな。うちの宿は基本的に種族によつては泊まれないつことはないぞ。なんでも、この宿を最初に作つた人……俺の曾祖父が猫の獣人だつたらしくてな。そういう理由もあつて、獣人に對してはちょっと親近感があるくらいだ」

「そうだつたんですか」

だから宿屋の名前もみけねこなのかな？

その曾祖父は三毛猫の獣人だつたとか？

「それで、そいつも泊まるつてことでいいのか？」

ミルドさんの言葉に、僕の後ろに隠れていたノアルはこくんと頷く。

「……ん、泊まる。それと、ありがと」

「ん？ 何がだ？」

「……ノアルが倒れている時に面倒を見てくれたつて聞いた。だから、ありがと」

「ああ、そのことか。気にしなくていい。元気になつたみたいでよかつたな」

「……ん」

ノアルはミルドさんにそうお礼を言うと、僕の後ろから出てきて控え目な笑みを浮かべた。

それを微笑まし気に見てから、ミルドさんは言う。

「そういえば、ショーマは最初に三日分の宿代を払つていたが、これからどうすんだ？」

「実は、明日から少し遠出することになりました、泊まるのは一旦今日までですね」

「そうなのか。戻つてくるのか？」

「そのつもりです」

「そうか。気を付けてな」

「ありがとうございます」

「一旦話がまとまったのを見て、ミルドさんはノアルに水を向ける。
「で、ノアルはどこに泊まるんだ?」

「あ、じゃあ新しい部屋を——」

「ショーマと一緒の部屋がいい」

僕の言葉を遮つて、ノアルはそう口にした。

「えっ!? 良くなくない!?」

「……ただでさえ、必要なものを沢山買つてもらつたから、これ以上私のためにお金を使ってほしくない」

「い、いや……でも……」

決めかねている僕を横目に、ミルドさんはノアルに聞く。

「なんだ、一緒の部屋でいいのか?」

「……ん、いい」

「なら、ノアルの分の代金はサービスしてやる。一泊だけだし、ショーマはミラルのことを構つてくれたからな」

僕が狼狽えていた間に、あれよあれよと一緒の部屋に泊まることが決まつてしまつた。
ま、まあ、道具屋で寝袋も買つたし、僕はそれを使って床で寝ればいいか……

3 料理を作ろう！

「よし、じゃあ料理しようか」

「……おー」

部屋決めで一悶着あつたが、気を取り直して僕とノアルは、明日からの食事を作るために、みけねこの厨房を借りた。

ミルドさんの奥さんであるフフさんは買い物に行つていて留守にしていたので、ミルドさんに厨房を借りていいか聞いたところ、思つていたよりもあつさりオーケーをもらえた。

なんでも、あらかじめご飯を用意してから依頼に行く冒険者も多くはないがいるにはいるらしく、使つた調理器具などを最後に洗つて片付けてくれれば使つていいんだとか。

「ちなみに、ノアルは料理出来る?」

「……あんま出来ない。けど、何か手伝いたい」